

EYES 1

A m i k a & M i c h a e l

佐野光音

Hikarune Sano

Eternity



エタニティ文庫

一章 最悪な出会い

あたしは最近、ロクなことがない。そろそろ誕生日だというのに、気が滅入ることは
かり起こってる。

足を踏み外して地下鉄の長いエスカレーターを滑り落ちたり、歩いていたら麻雀荘
の古い看板が落ちてきて頭に直撃しかけたり、涎を垂らした野良犬四匹に追われたり、
暴走ダンプの下敷きになりかけたり。反射神経はいいほうなので、どうにか難を逃れて
きたけど、十六歳の身空で遺書を書いておかなきゃならんかと思うほど最悪続きた。

こんなブラックな状況と気分を追い払い、心機一転するためにあたしは決意した。高
校生活をバラ色にするためにも、ずっと恋焦がれていた檀君に自分から突撃することを。
そして、十七歳の誕生日を迎えたその日、あたしはフラれた。木っ端微塵の玉砕で、

心機一転はお先真っ暗大暗転。

「気が強い女はニガテで」と、即答されて、呆然。

気が強い？ あたしの？ どこが!?! つうか、こんなフラれ方って、ありえなくな

い!?

あんたに告白するのだった、一年二ヶ月半悩んだのよ。去年の四月、入学式に目ぼれてから、どんだけ毎日恋焦がれてきたと思ってるの？ 一年二ヶ月半、自分の勇気のなさにむせび泣きながら、こつそりあんたを眺めてきたわけよ。

「おはよう」って声かけるのもためらって、それだけでバコバコもんよ、心臓が。「おはよう」って返ってきたら、「ああ、今日も頑張って学校に来てよかった!」と、夢見心地になったのよ。それだけでも幸せだったけど、やっぱりガマンできなくて。

なのに、思い切ってキモチを告げた健気な女の子に、そういうこと言うかよ!?

びっくりして。びっくりしすぎて、手にしていた学生鞆でバコツと殴ってしまった。頑丈な革の鞆を振り上げながら、「今日は教科書が多い日で、しかも英語の辞書まで入ってるんだ。重くて痛いかも」と思ったのに、止められず、振り下ろしていた。

檀君は、「うっ」と声を発して、体育館裏の湿った土の上に倒れて、ノビてしまった。「あんた一生、檀と口きけないね」

校門あたりで事後報告を待っていた文月ふづきを携帯で呼び出して、二人で檀君を保健室まで運んだ。「重い!」と文句タラタラで足のほうを抱えている文月は、小学校時代からの友達で中学も同じ、高校も同じとこに合格した上に、二年でクラスまで一緒になった腐れ縁だ。

その後の保健室で、あたしは、養護教員とクラス担任にこつり絞られてしまった。

「バカモノ! 首の骨折って死んだらどうするんだ!」

と、怒鳴られる始末。担任の大鳴、通称・怒鳴りの大鳴に頭を数発叩かれながら、先生だつて叩いてるじゃんよ、と文句を言いたいのを堪こらえていた。

「大体、学生の自分は勉強なんだよ。ナニ色気づいてんだ、バカモノが。告白なんか十年早いんだよ!」

そんなこと言つてたら、先生みたいに三十過ぎてても独身になるじゃんか、とは、さすがに言わない。それくらい知恵はある。運んでから十五分、大鳴先生の怒鳴り声で、檀君の目も覚めたらしい。ほつといてあそこに置いたままでもよかつたかも、と、心の中で毒づく。好きなキモチなんて、一瞬で冷えきってしまった。あたしの一年二ヶ月半は、何だったの？

檀君は、先生のお説教を制して言った。

「俺、全然平気です」

痛そうに頭を左右にひねって、動くのを確かめてから、上半身を起こした。

「大丈夫? 気持ち悪くない? 吐き気とか、頭痛とか、目がおかしいとか」

養護の先生が、檀君の顔を覗き込むようにして質問している。

檀君は、「平気です」とはに自分で答えて。それから体をずらして、あたしのほうを見た。

「高橋。ごめん」

思わぬ「ごめん」の言葉を聞いて、驚いてしまう。何も言えなくて、彼を見ていたら、俺が言いすぎた。ごめんな」

もう一度、真剣な顔で、あたしに「ごめん」を言ってくれた。

……だから、好きだったんだなあ。一目ぼれしてからも、あの真っ直ぐさというか、頭も良くて器用そうなのにふと見せる不器用さ、男の子らしい素直なところを知るたびに、ますます好きになっていった。

文月におごってもらったマツクのポテトとアップルパイと苺シェイクを前にして、あたしは悲しくなって泣いてしまった。フラれたことよりも、いい人だって知ってたのに、とつさに殴ってしまった自分がブルーだった。

「奮発してごちそうしてるんだから、元氣だしなよ。こっちがおごってほしいくらいだよ。あの重い檀、運ぶの手伝わされて」

泣きながらパイにかじりついていたので、呼吸と返事に詰まってむせそうになってしまっ

まう。

「いいよ、今日はさ」

いちゃもんをつけてから、文月はちょっと満足げに笑った。

「ガマンしてたんだよね、あたし。去年の入学式からずっと」

文月が頷いて相槌を打ち、あたしも頷いて言葉を続ける。

「心臓バコバコでさ。いざってなると、やっぱりバコバコで」

「うん」

「でも、やつは駄目で。いざとなったら痛いかもって思ったのに止められなくて。やつは我慢できなくて。檀君が『うっ』て叫んでから、いけないことしちゃったって青くな

って」

「ちょっと待って」

「確かにバコバコしてて、よくわかんなかったけど」

「待って！」

手で制されて、ぼかんとして文月を見る。

「なに？」

「あんたの話、微妙なんだけど。それは、体育館裏で、告った話でいいんだよね？」

「そうだよ」

「体育館裏で、初体験した話じゃないんでしょ？」

「隣の子たちが、ヘンな顔してこっち見てたよ。あんたの話、微妙なんだよ。

「隣の子たちが、ヘンな顔してこっち見てたよ。あんたの話、微妙なんだよ。なんか、卑猥っていうの？」

文月が、「微妙」を繰り返して言う。

「ガマンできないだの、バコバコだの、痛いだの。うっ、て叫んでとか、やめれ。並べるとマジエロくさじ」

「エロくさい!? やめてよっ。文月はエロ漫画を読みすぎなんだよ!」

「漫画は芸術よ」

「ええ? あのすぐに脱いじやうやっちゃうの話が?」

「そういうのばっかじゃないし。……それより」

「でもそういうの、多くない? この間、文月から借りたレイプものも怖かったよ? 俺がイカせてやるとか、俺じゃないとイケない体にしてやるとか、犯されても体は正直だとか。ふざけてるよ、レイプはレイプじゃん」

「そうなんだけど。いや、そうじゃなくて。あの話は、男の心にある深い闇が、癒いされていく繋がりについてさ。そうじゃなくて、後ろ」

「癒いされていく繋がり? なんかやらしー」

シエイクを飲んでケタケタ笑っていたら、目を見開いている文月の顔がただならぬ様子だったので、何事かと思って視線の先を見た。あたしの背後。

見知らぬ外国人が立っていた。どう見ても外人。胸の下あたりまで伸びているまっすぐな金髪だけでなく、目鼻立ちからもわかる。サングラスをしていて瞳の色は見えない

けれど、背が高く、手足の長さも頭身も日本人とはまるで違う。

その外人は、あたしのほうを見ていた。正確には、あたしたちのほう、だと思う。

ストローをくわえたまま、あたしはその外人を見上げた。文月を振り返って「知り合いい?」と訊くと、勢いよく首を振り返される。外人を眺めたまま。

「高橋阿見香あみかって、どっち?」

透明感のあるハスキーな声を聞いて、男だったのか、と思う。身長が高くて、髪が長くて顔立ちも綺麗だから、どっちなのかわかりにくい。文月があたしを指差すと、「こいつ? さっきからレイプだのイカせてやるだの、犯されても体は正直だの、頭がおかしい発言を大声で繰り返してる、これ?」

日本人かよと思うほど堂に入った日本語を操り、親指であたしを示して、その外人は深刻そうに首を振った。

「最悪」

「なにが?」

カチンときて、聞き返す。初対面の人間に、「最悪」ってなに!? 「最悪」って!

「勘弁してくれ」

「はあ!」

その男が後方を振り返った拍子に、別の外人がさらに二人いるのが目に入った。男性

と女性。肌が浅黒い、背の高いモデルみたいな男性と、向日葵色の金髪でふわふわ頭の、すごく綺麗な女性だった。

「失礼よ、ミカエル」

女性も流暢な日本語で言い、心から申し訳なさそうにあたしを見た。

「念のためにどっちか訊ねてみたが、最悪としか言いようがない。失礼もなにも、女扱いどころか人間扱いもできないね、こんなやつ」

「だからあんた、さつきから何なのよ？」

夕方の、混雑しているマツクの中は、静まり返っていた。この外人三人がやたら目立ちすぎて、誰も彼も度肝を抜かれて見入っている。あたしだって、こんな三人、雑誌でもテレビでも見たことないくらい。でもすごく腹が立ってて、この三人と一緒に注目を浴びてる事実を気にしてる余裕もなかった。

「あんた？」

サングラスの奥で、男が目をすがめたのがわかった。

「あんただって、すごいひどいこと言ってるじゃん。文句ある？」

「バカはすぐにケンカを売る」

「はあ？」

「ミカエル！」

女性が割って入ろうとしたとき、再び首を振ったその男が身を翻して立ち去ろうとした。た。

「無理。こんなやつ」

「そうは言っても」

歩き出すのを止めようとする女性の手を避けて、肩越しにチラッとあたしを見る。

「こんなやつと結婚なんかできない」

………結、婚？ ケッコナーリー!?

とっさに立ち上がり、その外人の腕を掴んで怒鳴っていた。

「なに言ってるの？ あたし、あんたのことなんか知らないし！ あんたのほうがよっぽど頭、おかしいよ。イカれてんじゃないの？」

「他人への口のきき方も知らないのか」

「ヒトに言える言葉!？」

「触るな。バカが移る」

気づいたときには、その外人の頭がピンク色になっていた。金髪も、黒いサングラスも、顔から胸元にまでピンクの流れが滴っている。飲みかけの苺シェイクの中身を、その不愉快極まりない男めがけてぶちまけていたらしい。怒り心頭で。

そして、呆然としている男にさらに、クシヤツと潰したシェイクのカップを投げつけた。

「なにふざけてんのか知らないけど。こっちこそ願い下げだわ、あんたみたいなの。この世から男が全部いなくなっても、あんたなんかまっぴらゴメンよ」

啖呵を切って、「帰ろう」と文月をうながし、人垣を掻き分けて店の外へ出た。文月が目を白黒させて、息を切らしながらついてくる。

「どういうこと!? どういう知り合いなの!？」

「知るわけないじゃんっ、あんな失礼なの!」

「でも、名前言ってたよね? 高橋阿見香って」

一心不乱で歩くあたしの腕をグイッと掴んで止まらせる。

「結婚って、なんなのよ? 阿見香っ」

「だから、あたしも何も知らない」

「あんた、今日、檀に告ったばかりじゃん? なのに、結婚って、なんなの!？」

文月に攻め寄られて、マックにいたときよりも脳ミソが混乱してきた。

「だから、知らないんだって!!」

スクランブル交差点の真ん中で、叫び返していた。怒り心頭、アンド、超パニックで。

あたしの父親は、外国人だったらしい。らしい、というのには、一緒に暮らした記憶がないから。あたしが三歳のときに他界して、うちには写真が一枚あるだけだ。しかもお

母さんは、その人と籍を入れずにあたしを産んで認知もされなかったもので、あたしは私生児になっている。

俗に言うハーフ、なんだけど、お母さんの血が強烈に濃すぎたのか、あたしはどこからどう見ても日本人そのものに育った。髪の色、肌の色、顔の作りも体型も日本人で、よく見れば肌が白いか鼻筋が外人ぽいとか、足が長めとかたまに言われる程度だ。

ただ、瞳の色は、普段は黒なのに、太陽の光を受けるとちよっと緑色がかって見える、フシギな色をしてるらしい。外で鏡を見てるわけじゃないので、自分ではよくわからないけれど。

生まれも育ちも日本で、外国には旅行に出たことすらない。あたしにとって外人も外国も、遙か彼方の存在なのに、それがいきなり名前も知らない外人と結婚って。ありえない。

お母さんは、世間で言うところのシングルマザーで、女手ひとつであたしを育ててくれた。母一人子一人の生活もそう悪くはない。十年は住んでいる六畳二間のアパートで、仲むつまじく暮らしている。

夕食の支度をしていると、お母さんが帰ってきた。

「今日はなに? え? 野菜炒め!？」

「豚肉入りだよ。後は温泉卵のせ冷や奴、コチュジャン風味。と、お味噌汁。上等じゃん」

仕事で遅くなる日が多いから、あたしが晩御飯の支度の大半を担当している。文句でもあるの？ と口を尖らせたなら、せっかくの誕生日にと呟いて、肩を落としている。

ああ、そうだった！ 忘れてた!! 失恋のショックと、あの無礼なパツキンのせいで。「誕生日なのに、あなたに食事の支度をさせてる私も悪いんだけどね」

ケーキは買ってきたからと、テーブルに白い箱を置く。結構大きいから、かなり奮発してくれたみたいだ。給料日前なのに。うちは貧乏ではないけど、余裕がある生活でもない。

指についたコチュジャンを舐めながら、「ありがと」と、気楽さを装って言う。恥ずかしさが先立って、子供のときみたいに大袈裟に喜ぶことが、もうできないお年頃だ。

「プレゼントは、お給料が出てからね。ボーナスも入るから。もう少し待ってて」

「いいよ。別に」

嬉しいけど、無理しないでほしい。それだけのことが言えないのも歯痒い。

突き放した言葉になってしまった気がして、スーツを脱ぐ母親から目をそらした。

毎日一本だけ飲む三五〇ミリリットルのビール、お母さんの楽しみをコップに注ぐ。

生き返るわ、なんて喉を鳴らして飲んで、満足そうに息をつかれると、あたしも安心する。

「阿見香も一口どう？」

ごくたまに、未成年だけど、晩酌に一口だけ付き合う。

「これをおいしいとは、なかなか思えないね」

「早く大人になりなさい」

苦さに口を歪める娘を見ながら、冷や奴を頬張って笑っている。

十七になつたばかりだからまだ時間ばかりかかると、早く楽をさせてあげたいと思うあたしはマザコンなんだと思う。だから時々、記憶にない父親を責めたくもなる。なぜお母さんをシングルマザーにしたの、って。死んじゃったから、だけじゃなくて、なぜ認めもしてくれなかったの、って。

望まない子供だったのかもしれないけど、お母さんのことをちゃんと思いやってくれていたなら、認知しないとかありえない。ご飯を食べながらそんなことを思い、ふと顔をあげた。

「お父さんの写真、あつたよね？」

たぶん十年近く、あたしは父の写真を見ていない。見たくなかったから。

父親がいないってよく虐められてきたし、父なんか嫌いだと思っただけだ。

見てもいい？ と言うあたしに、お母さんは、どういう風の吹き回しかしらと言いながらも、どこか嬉しそうだった。寝室の鏡台へ行き、引き出しを開ける。そんなところにあったのか、と母親を眺めていると、繊細な銀細工の写真立てに収められた古い写真が目の前に置かれた。見知らぬ外国人の男性と、まだ若いお母さんがいる。それから、男

性の胸に抱かれている、白いおくるみに包まれた赤ちゃん。

「これ、あたし？」

「そうよ」

お母さんが、幸せそうな笑顔で頷いた。写真で見ても、わかる。赤ちゃんのあたしが、そつと慈しむように抱かれているのが。小さい頃に見たときにはわからなかった、愛情みたいなものが、伝わってくる。

「すごく、ハンサムな人だね」

素直に、そう思う。で、あたしはやっぱり、どこもかしこも母親似なんだなって。

お母さんがブスだとは思わないけど、平均的な東洋人顔っていうか。

娘の感想に、お母さんが微笑んで、少女みたいにはにかむ。

「どういう人だったの？」

「……また、おいおい、話すわ」

あたしの問いに、寂しそうに答えた。

「一つだけ。阿見香。あなたの名前は、この人が付けたのよ。漢字は、私が考えたの」

言いながら、じっと見つめてくる。

「瞳が、お父さんと似てるのね。とても美しい、エメラルド色の瞳をしていたのよ」

写真を見ながら、あたしは別のことを考えていた。写真に写る父は、今日会った外人

にどこか似ている気がする。あの人はサングラスをしていても顔立ちの綺麗さがわかる、ズバ抜けた美貌の持ち主だった。それと比べるとハンサムさでは写真の中の父のほうが半分以上だけど、どこが違って言えないものの、なんとなく似ているように思える。同じ外人で、白人だからかもしれない。日本人と中国人が海外の人から見たら見分けがつきにくいっていうのと同じかも。

「なんで、アミカ、って名前を、つけたのかな？」

お母さんは、しばらく黙ってから、そつと息をついた。

「それは……私も、わからないわ」

次の日、登校して教室に入ると、真つ先に檀君と目が合った。げつ、と思つたものの、気まずさをはぐらかしたくて「ゴメン」と手を合わせる仕草したら、「いいよ」ってカンジで苦笑してくれた。やっぱいい人かもと、昨日に続いて再認識していたら、人差し指でちよつと手招きされたので、ドキドキしながら檀君の机のそばに寄る。

檀君が、周りにさつと目をやった。クラスメイトが聞いていないか確認してるみたいだ。

「昨日のことなんだけど。……まあ、お互いに、気にしない方がいい？」

「ああ、うん。そ、そうだよね。ってか、あたしも、ものすごく……ってわけで、言つたんじゃないし」

そんなわけないんだけど、ぎくしゃくした関係になりたくなくて取り繕^{つくろ}ってみる。「クラスメイトとして、ま、これからもヨロシク」

彼も、あえて気にしないって苦笑を見せて言ってるから、声を潜めて続ける。

「俺、別に、嫌いってわけじゃないよ？ 昨日、言いそびれたんだけど」

「……そうなの？」

「大人しいほうが好みつてのはあるけど。高橋のこともそこまでよく知んないから、答えに困って、とっさにへんなこと」

「でも、昨日、気が強いって」

「いや、それはわかるよ」

「そう？ あたし、気が強い？ 自分じゃ、まだまだだなんて思うんだけど。気弱すぎて」

「……………」

目が笑ったまま、檀君は沈黙している。

「自分観察苦手？」

「あ。それは得意」

普段から自認してるので正直に答えたら、檀君がお腹を抱えて笑い出した。そんな派手に笑うとみんなに注目されて、二人で何を話してるのか怪しまれるよと、あたしが慌ててしまう。

「むっちゃ天然人ってんだな」

笑いを止めずに言う。明るいのは知ってたけど、二人だけでこんなに長く話したことがないので、新鮮に思えた。

「檀君って、よく笑う人なんだね」

「俺？ ああ、ヤバイキノコ食ってんじゃね？ って、たまに言われる」

ヤバイキノコ。笑い茸^{ぢぢ}のことかと訊くと、頷きながら言った。

「俺のこと、檀君じゃなくていいから。みんな、ヒリって呼んでるし」

檀、聖^{せい}。ヒリ。本名のヒジリからとってヒリと呼ばれている。男子も女子も、そう呼ぶ人が多いから、檀君にとっては特別なことではないらしい。

そう言われても、そんな馴れ馴れしくは呼べないよと思いつながら席を離れた。長話をしていると、目に付くし……と警戒していたそばから、四人の女子が顔を揃えてこちらを見ていた。いつも、「ヒーリーやだあ」とか奇声を発して、檀君に絡んでる子たちだ。中の一人はファッション誌の読者モデルもやってお洒落^{しゃれ}好きな子で、その子を中心にしてグループになっている。気が合うか合わないかは別として、あたしとはまったく違う価値観の子たちだなと思つて、同じクラスになってから一言も話していない。

化粧禁止の高校なのに、読者モデルの島谷^{しまた}さんがマスクラをつけた目で睨^{にら}んでくるのを、見なかつたふりで自分の席に着く。何か言われたら言い返せばいい。それだけのこ

とだ。

鞆から出した教科書を机に突っ込みながら、「あれ？」と思う。急いで教室を見渡して、文月がまだ来ていないのによく気づいた。普段はあたしより早く登校しているので、珍しくて、もう一度室内を確認する。……いない。休みなのかな？

予鈴が鳴ってから、遅刻ぎりぎりまで飛び込んだときには、さらにびっくりした。どうしたの？ 視線を送ると、気づかなかったように文月は視線をそらした。こっちを見ていたのに。まさか昨日の夕方の一件を、まだ怒ってるのかな。あのバカ外人のせいで。

授業が始まると携帯使用は厳禁なので、『遅かったね。何かあった？』と、机の陰で手早くメールを送ると、二分ほどで返信があった。

『後で話す』

返信が来たことに安心して、携帯を机にしまう。

怒ってるわけではなさそう。よかった。そう安堵したのも、つかの間だった。

「えー。今日は突然なんだが、転校生を紹介する」

大鳴先生が咳払いをして言い、教室のドアから廊下に顔を出した。数秒を置いて、現れた顔に、あたしは言葉を失う。……あれは……あの男は。

一瞬、ここはどこ？ と、あたりを見回してしまった。斜め後ろの文月を振り返ると、

口元にそっと人差し指を当てるジェスチャー。

ん？ どういう反応!? え？ 来ることを、知ってたってこと？ なに？ どうして!?

「転校生の、ミカエル・ス……ス、マクラグドス君だ。……しかし、背が高いねえ、君先生の三倍はありそうだな」

場を和ませる冗談のつもりなのか、慣れない笑いにチャレンジして、一人で乾いた笑みを浮かべる先生。「いや、三倍もあつたら化け物ですよ、大鳴先生」とは、誰も突っ込まない。

クラス中が、呆然とした雰囲気、一点を見つめていた。

あの、外人。あたしが昨日出会った、あの不愉快極まりない男の顔を。

見間違えるはずがない。サングラスがなくても、同一人物だと断言できる。どう逆立ちしても、高校二年には見えない態度とツラ構えで、あの外人が制服を着て立っている。公立校にしてはかなりオシャレと噂されている上衣短めな濃紺の学ランを、パリコレのモデルさながらに着こなして。……制服に見えない。どこぞの国の王族に仕えるお仕着せのような。身近なものに例えれば、高級ホテルのホテルマンのような。行ったことはないけど。

六月に入って制服が夏服になっても、梅雨の肌寒い日には、学ランで来る男子も多い。

白い清潔なシャツと、濃紺のネクタイの夏服も、この人なら素敵に着こなせそう。つて、ホメてどうするよ、あたし！ それどころじゃないっ！！

「えーっと。みんな、びっくりしてるな。そうだな、じゃ、自己紹介を」

大鳴先生が、持て余した指揮棒を投げるがごとく、さっさと外人にその場を託す。

「只今、ご紹介に与りましたミカエル・スマクラグドスです。国籍はギリシヤです。名前の読み方はギリシヤ語読みではミハイルになりますが、どちらで呼んでいただいてもかまいません。よろしくお願ひします」

ギリシヤ国籍。腹が立つくらい流暢な日本語で、「本当に外人なのか!? 高校生なのか!?」と誰もが疑う立派な挨拶を手短かにされ、一同あ然。大鳴先生もかなり困った様子で頭を掻いている。四月からこれまで、こんなに困った顔をする先生は見たことがない。怒鳴りの大鳴と学校中で有名で、みんなからけむたがらされていて、生徒に隙を見せる先生じゃないのに。

「じゃあ、席は……そうだな。高橋の隣。高橋大吾じゃなくて、女子な。阿見香のほう」
「は？」

手を上げて、と言われる前に、あたしは反応してしまった。しかも、大声で。

「は？ じゃないだろ、高橋」

普段なら怒鳴つてるところなのに、先生が受け流す。あたしの両隣、空いてないんで

すけど？

「倉持。おまえ後ろに移動して……と言いたいところだが、ス、スマクラグドス君、背高いんだよなあ。一番後ろじゃないと……どうすっかな」

呼び慣れない名にどもり、あたしの隣の倉持君に指示しておきながら迷い出す。すると、
「後ろでいいです」

あの男からのひと声。

「じゃ、とりあえず、一番後ろの空いてるところで。後で席替えしてもいいな」

先生が君付けすることにも、しゃあしゃあと意見をする転校生にも、呆気にとられて。みんなが、教室の後ろへ移動する外人を見つめた。背筋の伸びた美しい後ろ姿は、思わず見惚れそうなほど。均整の取れた肩幅や頭身、腰にかけてのラインも足の長さも、日本人のものではない。

全校の男子を、一瞬にして敵に回す存在だわ、これは。昨日は解いていた金色の長い髪は、シンプルな銀の輪の髪留めで一つにきちんと束ねられている。学校指定の上履きではなく、黒いレザースニーカーを履いている足元まで、何か嫌な感じ。

椅子を引いて席に着くと、みんなが一斉に前へと向き直る。これ以上見ていたらマズイような、「いつまでも見てんなよ」的な、ピリツとしたオーラを発しているからだ。

あたしは前から二列目の自分の席から、文月のいる席とは反対側の斜め後ろ、外人男

の席に目をやった。

あの男。一度もこっちを見なかった。先生があたしの名を呼んだときも、あたしが即座に反応したときも、こちらを見なかった。目を合わせる意思すら微塵みじんもないらしい。

上等じゃんよ。世界で一番嫌いな男から、宇宙で一番嫌いな生き物になっただけだわ。休み時間になっても、教室は静まり返っていた。あの迷惑すぎる存在感のせいだ。

少しずつ、椅子を動かす音、ひそひそ話す声が広がって、あたしも文月に話しかけようとしたら、遅刻した上に日直になっていた文月は「また後で」と慌ただしく教室を出ていく。

すれ違いざまに一言、「あの外人、かなりヤバイかも」と、言い残して。

文月には、思わせぶりなことをチョロツと言う癖がある。案の定、授業の間、あたしは落ち着かなかつた。ヤバイって？ ヤバイって何が？ 何があったの？ 文月つてば、チラツと、あの外人のほうを振り返ってみる。こっちを見てたらまずいなと思つたけど、見ていなかつた。堂々と携帯携帯をいじっている。授業中はダメだって、聞いてないの？ 転校早々に、先生に注意されて焦るのを内心で期待していたら、数学の先生は何も言わなかつた。あんな隠さずいたら、気づいてるはずなのに。

授業の終わる数分前、もう一度そっちを見ると、まだ携帯をいじっていた。転校初日から、あの態度はどうよ？ 呆れて眺めていたところで、檀君と目が合った。あたしと

あの外人の席を結んだライン上にいるので、自分を見ていると思つたらしく、ちよつと微笑んだ。あたしも、不機嫌さを慌ててひっこめて笑顔を見せる。その途端、頭に走つた衝撃。

「高橋、何よそ見してんだ！ 最後の問題、おまえ解いてみる」

教科書でアタマをぶたれた挙句に指されてしまつて、頭は痛いわ、気は動転するわ。しかも、問題どこだかわかんないし。解き方すら聞いてなかつたし！

正直に言うしかないの、さっさと「わかりません」と答えたら、もう一発ぶたれた。「明日、もう一回指すからな。勉強してこい！」

昼休みは小雨が降っていた。梅雨らしい天気で、文月とあたしは教室でお弁当を広げることにする。教室のドアの窓には、珍入生を見学にきた生徒、他のクラスの主に女子たちが、キヤアキヤア喚わめきながら張り付いていた。あの外人は、教室の隅の自分の席にいて、我聞せずといった態度でミネラルウォーターを飲んでる。メシ食わないでいいんかい、なんて、心配なんかしてやらない。また携帯いじっているし。ケータイ中毒じゃないの？

「あの人さ。ゆうべ、うちに来たんだよ」

潜めた口調で文月が言い、仰天したあたしは口元まで運んでいた箸を落としかけた。

「タイミング良く私が出てよかったよ。外人がいきなり来て、しかもあの顔でしょ。親に見られたら大騒ぎになってたよ。明日から学校行くけど、自分の顔を見たとか、誰にも言うなって。知らん顔してろって。阿見香と自分が顔見知りだということも、人に言うなってさ」

「なにそれ!？」

叫びを辛うじて抑える。文月は不快そうに首を振り、あの男のほうは見ようともしない。「しかも、電話一つですぐに君の父親の職をなくすることができるよ。約束できる?」
つてさ」

箸を持ったまま、息を呑むあたし。

「それ、脅迫じゃん! 何でそんなこと!?! だいたい、なんで文月の家を知ってるの?」「学校の名簿。何でうちを知ったのか聞いたら、そう言ってた。マックで、文月って名前聞いてたみたい」

「どうしてそこまでするの? そんなことされる理由、ないよ!」

「言えるのは、阿見香の身辺は、くまなく調べられてそうってこと。尋常じゃないよね」さらに声を潜めて、「まさか、ストーカー……」と呟くと、文月も深刻な顔であたしを見た。

「わかんないけどさ。気をつけたほうがいいよ。学校にまで潜りこめるって、普通じゃ

ない。名簿も見られるってことは、先生も丸め込まれてるんだよ」

「ストーカーって、転校してきて、生徒のふりしてまで、嫌がらせすんのかな?」

「聞いたことないけど。只者たまたまじゃないのは確かだよ」

予想もなかった話に、あたしは大きな溜息をつく。なんなの、あいつ。初対面のあたしに意味不明なことを言ってきたかと思えば、学校にまで現れて。友達のことまで調べて、脅迫するなんて。腹立たしさとムカムカしながら、「ごめん」と謝るあたしに、文月が「なんで?」と訊き返す。

「あたしのほうに心当たりはないんだけど。文月にまで迷惑かけて、ごめん」

「阿見香が悪いんじゃないし」

「そうなんだけど。でも、こうして喋ってくれて、ありがと。フツー、そんな嫌な思いさせられてたら、あたしと話すのもイヤになるでしょ」

「嫌っていうか、理由が見えないだけに不気味。あんたのことも心配だしね。しかし、いろいろ立て続けにあるよねえ。不連続で生傷が絶えないと思ったら、今度は変な外人が登場するし」

「ご心配、どうも」

お弁当から、エビフライを取って文月に渡す。

「それじゃちよつと安いなあ」

「今度、おごるから」

「マックのえびファイルオ、三回分で手を打とう」

三回分。抗議の言葉を呑みこむ。それで友情が保たれるなら、有難いと思わなければ。了解、と返事をする、嬉しそうな顔をした文月に満足げに頷かれた。

「悪かったな、さっき」

昼食で移動していた机を戻していたら、檀君が謝ってきた。

「何の話？」

「数学の。なんか高橋だけ怒られて」

彼には全く落ち度がないことなのに、謝られてしまった。でもそこで、「あなたが原因じゃないよ」とか、「あなたを見てたんじゃないよ」とか、律儀に返すのも微妙すぎるので、気にしないで、とだけ答えておいた。

「数学、今日のどこ、マジでわかんなかった？」

「今日のどこ？ ううん。今日に限らず全滅」

「全滅かよ」

苦笑して、それから言った。

「教えてやるのか？ 数学」

ということ。放課後に、檀君に数学を教わることになった。

文月には、先に帰っていいからと告げたら、「なんでそうなる!？」と、ものすごい驚きよう。

「昨日、告^こつてフラれた相手に、数学を教わる？ しかもマンツーマンで。おかしくない?」

「言われてみるとそうなんだけど、何か告^こつたことでちょっと親しくなってきた感じ？」

「フラれたのに?」

「それは、好みのタイプじゃないからとかなんとか。大人しい女の子が好きなんだって」

「自分で言^いってて虚^{むな}しくない? 惨^{さいは}敗^{ばい}した相手のそばに、嬉々^{きき}としているのもどうなの?」

何だかんだ言^いつても、そりゃあ喜んじゃうわよ。この一日で、目まぐるしく感情や状況が動いていて忘れかけていたけど、あたしは恋する乙女なのよ。

フラレはしても、想いは色あせるところか、檀君がけっこういい奴だと再認識して、ますます強くなる。断られた一時は、冷え切ったように感じておきながら。

「私にはよくわからないね。あんたも檀も、なに考えてんだか。ついでに言えば、あの外人のほうもつとわからないけど」

「それは思い出させないで」

「お、突撃してる」

文月の視線の先を見ると、あの読者モデルの鳥谷さんとその取り巻きグループが、外人の周りに集まっていた。元凶の顔は女の子に囲まれていて見えないものの、キャーキャーとトキメキ発声が続いているところを見ると、あの男、まんざらでもなく相手をしてるようだ。

女好きが、と毒を吐いてチツと舌打ちするあたしに、文月が意地悪く言う。

「結婚がどうか言われた身としては、複雑？」

「全然」

「何なんだろうね。いきなりの、こんなやつと結婚できない。発言といい、転入といい」「こっちも、あんなのとは嫌です」

力いっぱい主張して答えると、文月は眉をひそめる。

「ねえ。ホントに心当たり、ないの？ 結婚だよ？ 結婚！」

「ない。向こうの妄想でしょ？」

きっぱりと言いつけると、片目を細める文月。

「その体で？」

「文句があるなら本人に聞いてきて！」

妄想です、と断言されてもイヤだけどね。まったく、気持ちが悪いつたらありゃしない。

待ちに待った放課後になり、あたしは自分の身だしなみを入念にチェックした。

この高校は、女子は濃紺のセーラー服で、白いリボンとの組み合わせが清楚な感じで人気がある。進路希望では最終的に、制服で決めてここを受験した。ついでに文月も同じく。

夏服は白地に濃紺の襟で、冬と同じ白いリボン。これが、風になびくと様になるんだけど、白地だから食事のときにシミが付きやすく、ちよつとしたハネでも汚れが気になるってしょうがない。今日の檀君との勉強会は、教室は人がいるから雨上がりの屋上でとの話になったんだけど、行く途中で小さな汚れに気づいてしまった。慌てたところでどうしようもないと諦め、ボブから伸びかけのバサバサ気味の髪をパパッと整えて、檀君の待つ屋上へ駆けていく。

申告どおり全滅の数学に笑いながら、檀君は丁寧に教えてくれた。

彼のことについて、あたしは、知ってるようで知らなかったんだなと思う。笑い上戸なところか。屈託のなさとか、数学がなかなか得意なんだってことも。

額に落ちてくる黒髪が切れ長の二重に影を作ると、憂いを帯びたイケメンに見えるのも。離れていてもかっこよく見えてたけど、コレはかなりツポ。近くに來て初めて知った。他の子みたいに、「ヒーリ」って、甘えて呼んでみたくなったりして。ムリだけどさ。彼女じゃないのにベタベタする度胸はない。ああ、気が弱い自分が恨めしい。

教えてもらう合間に、転校生の話になった。

「六限目の体育、出なかったぜ。病弱で運動はダメなんだって」

「病弱!? あのでかい体で!? 血色の良さそうな顔して、ありえないでしょ」
見えないよな、と檀君も同意する。

「その間、体育館の周りをうろろうしてたらしいぜ。今日は男子は校庭で、女子は体育館だっただろ。相当な女好きじゃないかってウワサ出てるよ」

ま、男はみんなそっかな、と付け加えられたけど、「檀君もそうなんだ?」とは、訊きにくい。

「さつきも教室で、女子に囲まれてたよ。まんざらでもなさそうに」

「高橋。辛辣しんらつだな? あの転校生に」

言外にはみ出た私情を、檀君が嗅かぎ取ったようだ。

「外人嫌い? 学校中の女子が色めきたってんに。大天使ミカエル様とかあだ名つけて、大騒さわぎしてるだろ」

吹き出しそうになった。天使って性格じゃないでしょ、アレは!

「なんか謎で。日本語ペラペラなもの怪しく見えるし、公立校に来るタイプじゃないよね」
ひっそり鼻で笑った、気持ちそのままの返答に、彼も頷うなづいている。

「マジ、謎だよな。外人は老けて見えるとは聞くけど、顔も落ち着はき方も、二十歳はたち過ぎ

でも通じそうだろ。ホントに高校生かよ? って思わないか?」

「思う。なんかエイリアン見てるみたい」

「ひでえ」

「だって、あの容姿からして、現実離れしてるじゃない」

「ってことは、かっこいいとは思うんだ?」

「世の中の見ればそうでしょ」

「高橋的には?」

「関わりたくない」

とつきについ、突き放した本音が出てしまって、訂正する。

「興味ないってこと」

「やっぱ、強いなあ。おまえ」

「二日続けて刺さなくても」

「ごめんと謝られ、引いてるとか嫌がってる感じじゃないのはわかってても、そう思われるのは気持ち微妙に落ちる。大人しい子が好きだって、聞いたばかりだしね……」

「あだし、そんなに勝気に見える?」

「クラス男子には評判」

衝撃。評判? 勝気で評判!? あだし、心当たりがないんですけど!? と、絶句して

いたら、明らかにされる忘れていた醜態の数々。

「このクラスになって一週間ぐらい経ったところ、男子が物投げて遊んでたとき、水で濡れた上履きが高橋の机にビシャッと落ちたんだよね。おまえそれに一瞥をくれて、モノも言わずに、投げた男子に向かってバシッと叩きつけたんだよ」

「覚えてない？」と言われ、首をブンブン振る。

「あつたとしても、ムカついてとかじゃなくて、持ち主に投げ返してやって、それで終わり、みたいな。覚えてないよ！」

檀君は、あたしの慌てっぷりに苦笑しつつ、言葉が続ける。

「その場にいた男ら、こえ〜〜っ状態。あの女子には気をつけようって言った数日後。今度は、ほら、自習中に、アレ膨らましてクラス中が大騒ぎで遊んでたらさ。高橋が、自分のとこに飛んできたソレを、壁にバンッと叩きつけて破裂させたんだ」

「……………それは、なんとなく、覚えてる。そのとき、あたし、日直で。ちゃんと自習させろって、先生に言われてて」

「そうだったんだ？ みんな、おまえが日直だったって、記憶にないと思う。俺もだぞ。その出来事だけが、くっきりしちやっって」

「ってか、アレってなに？」

「え？ アレって。膨らましたの？ アレだよ」

「白いフウセンのことでしょ？」

「フウセン？」

プフッと派手に吹き出した檀君は、腹を抱えて笑い始めた。

「知らないで叩き割ったの？ アレ、ほら、避妊するやつ」

大笑いでさらっと言われ、モロに叫ぶあたし。

「……………え？ あれ、コンドームだったの!? 本物見たことないもん、知らないよっ」

なんて、後で思い出したら、死にたいくらい恥ずかしい自己申告までぶちかまして。

「シーツ、ばか！」

慌てて口を手で押さえられ、檀君の手の感触に浸る間もなく、あたしも焦ってあたりを見回す。パラパラという生徒が五、六人、訝しげにこつちを見ている。

とぼけて視線をさまよわせた直後、

「げっ」

またもや珍妙な声を上げてしまった。給水塔の上に、あの外人が座っていたから。しかも、こつちをじっと見てる。

「なんであそこに。つうか、こつち見てるよな？」

気づいた檀君も驚いて、いまの騒動も彼方にぶっ飛んだ顔で目をばちくりさせてる。

アンタ、さっきまで女はべらして教室にいたじゃんよ？ 嫌な気分になって、再び手

元の教科書に集中しているふりで何も見なかった顔をしていたら、

「高橋、めっちゃ顔コワイ」

そっちのほうが驚きという口調で、じっと見つめられた。一年二ヶ月半恋焦がれた人に。「早々になんかあったの？ あの外人と。……あれ？ 朝もなんか、過剰反応してたな。先生が高橋の隣について指示したら、嫌そうに反応してただろ、思いつきり」

「外人恐怖症」

鬼の形相を見られた虚脱感で、適当に返事をした。あいつとやりあったことは、檀君には知られたくない。もう充分、彼の中ではキツイ女になつてゐるのに。まるで悪魔のごとく。

へえ、と檀君は物珍しそうにあたしを眺めている。

そろそろ下校しようというとき、家を訊かれて青梅方向と答えたら、「途中まで同じじゃん。一緒に帰ろう」と言われた。

マジで？ あたし、交際断られたんだよね？ 次の日から数学教えてもらつたり、一緒に帰ることになつたり。これはいったい？ 文月じゃなくても、理解不能な事態なんです。

檀君と一緒にいるのは想像以上に楽しかった。彼に恋してる乙女のハズなんけど、気

を遣わなくていいっていうか。彼が、人に気を遣わせない人なのかもしれない。それとも、やっぱり昨日の今日で、あたしが変に意識しすぎないように気を回してくれていたのかな。

幸せな気分と、でも彼女じゃないという事実の間をウロウロして、溜息。

まあ、いいか。一日ですごく親しくなれた気がするし。それもこれも告白しなければ起こらなかったことと、鼻歌を歌いながら駅の階段を下りて、徒歩で十五分の自宅に向かう。

見慣れた商店街を抜け、自宅のアパートが見えてきた頃。何か気になって、背後を見た。……誰も、いない。気のせいかな。

二階建てのアパートの階段を上って、もう一度、階段や通りを確かめる。

部屋に入ってから何だか落ち着かなくて、電気をつける前にカーテンの隙間から外を覗いてみた。

——ビンゴ。すごいカンしてる。あたし。

アパートの前の電柱の陰に、見覚えのある男がいた。あの外人。

転校してきたのとは違う、昨日マックで会った一人。肌が浅黒くモデル並みの風貌で、海外ブランドのメンズパンツ会社が土下座してスカウトしてきそうな、あの人。

鳥肌が立つ。あたし、寒気がしてる。……なんなの？ 不愉快とか最悪とか、散々悪

態ついたけど、普通じゃないことがあたしを取り囲み始めてる気がする。

お母さんに言う？ 警察に言う？ 文月はダメだ、迷惑をかけたたくない。いったい何が起こってるの？ 狙いは、あたし？ だとしたら、あたしをどうしようっていうの!?

翌日とその次の日は、平穩に過ぎた。学校でもおかしな変化はなかった。昼休みになると、このクラスが、女の園か、はたまた動物園かと言われる環境になるのを除いては。あの男も近づいてこないし、あたしも二メートル以内には絶対に近寄らなかつた。

何か変わったことはないかと気にかけてくれた文月に、尾行されていたことは伝えなかつた。次の日も、その次の日も、尾行はあつた。しかも帰りだけでなく、登校のときまで。変化といえば、檀君とはけっこう話をするようになった。休み時間になると「ヒーリー」と、取り巻いていた読者モデル代表グループが、あの外人にくっついて歩くようになって、檀君もヒマになっていたのだと思う。

土曜日と日曜日は、待ちに待った安息日だつた。サイコーにくたびれた一週間。

月曜日が始まると、またあの男に会うのかと思うと気が重くて重くて、どうにかしてズル休みはできないか思案したもの、今日休んでも明日も明後日も学校はあるんだとゲンナリして、行く覚悟を決める。

覚悟なんて、決めなきゃよかつた。朝のホームルーム早々、あたしは生き地獄に突き

落とされたのだから。大鳴先生が、「先週予告していた席替え」を実行したのだ。一番後ろの窓際、あの外人。その隣、あたし。二メートルどころか、一メートルも距離がない!!

「先生！ 黒板見えません」

移動するやいなや、訴えた。もちろんウソだけど。

「見えなきゃ隣に聞け。じゃ、授業を始める」

なんだとお？ 何なの、その横暴さは！ 一時限目は大鳴先生の授業で、ホームルームからそのまま流れ込んでしまったので、しょうがなく席に座る。左、目障りな外人。右、……右は……

「檀君!？」

最悪なんですけど、いろんな意味で。気が休まらないッ!

この場合で組む「お隣さん」というのは、左と決まっている。左の左は誰もいないから。黒板が見えないなんてウソだから、別に世話になる必要はないんだけどね。と思つていたら、一時限目の教科書をど忘れていた。家を出る直前まで、行きたくなくてウダウダしてたせいだ。

檀君に見せてもらおうと様子を窺うかがつてみれば、なんとということでしょう、檀君の右隣の子も忘れてる……

マジかよ!? 頭を抱えて渋々諦め、「スミマセン」と、左のヤツに声をかけた。マツクで口きいて以来だよ。一生、話したくない相手なのに。

教科書を、と言いかけて見てみれば、ヤツの机の上に出てるのは携帯だけ。

「教科書は?」

真顔で尋ねたら、

「いない」

ツンとした態度の返事。

「あんた、何しに学校来てんの?」

自分の有様を棚に放り投げて言うと、

「来たくて来てるわけじゃない」

明らかに不機嫌な口調で返された。だったら来んなよ! と毒を吐きそうになるのを堪えて、あたしは黒板を眺める。一限目の科目のノートはあったので、やる気なく書きなぐりながら。

大鳴先生は、あたしが教科書を出していないと絶対にわかってたのに、何も言わなかった。

怒られたいわけじゃないけど、おかしすぎない? ここ、二人並んで、教科書を出してない生徒がいるんですが?

休み時間は、文月の席に入り浸りになっていた。自分の席にいられないなんて悲しすぎる。

席替えはわざとで、先生もグルだと文月も領いた。

挙句、不幸は続くもので、チャイムと共にのろのろと魔の席に戻れば、ちようど入ってきた先生が「抜き打ちテストをする」と、のたまった。数学の。勘弁してよとげっそりしても、学生はテストから逃れられない身分なのだ、残念ながら。

三十分のテストは、先日、檀君に即席で教えてもらったもの以外は壊滅的だった。

そしてこの後、あたしはさらに地獄を見ることになる。先生の一声で。

「はい。隣の人と答案取り替えて。採点してくれ」

……隣? このカイメツテキな答案を、右隣の檀君じゃなくて、左のヤツへ。

右でも困るけど、左は……絶望的。公衆の面前で、「バカが移る」と言われたあたしなのよ。こんな答案見せたら、末代まで何を言われるか!

赤くなったり青くなったりしてるとコロへ、隣からヒラリと答案が来た。教科書はいらないと断言する人間が、テストなんか受けなくてもいいじゃないの。

なけなしの勇氣をはたいて、隣を見ずに答案を差し出す。沈黙が、コワイ。今日、席を並べてからずっと沈黙でいたから慣れているはずなのに、その沈黙が、凍ってる気配がする。

気配がする、なんでもんじゃなくて。左隣から来る空気が、バリバリ凍ってるよ……いいよ、いいよ。一日中、携帯ばっかいじってるアンタだって、期待できるもんじゃないでしょ？ と、意地悪な希望を託してみたら、非常に美しい答案に目が釘付けになった。まっさらで美しいんじゃない？ 綿密に、サラサラッと書かれてる数字が、形が整っているのに硬すぎず、すごく綺麗なの。名前の欄には筆記体で、流れるカリグラフィのようなローマ字。答案の名前が、芸術になっっている……。その顔で、この字は、卑怯じゃない？ 揃いすぎじゃない!? 黒板の答えと確認していくと間違いは一つもないし。赤ペンでいびつな丸を書くのも嫌になり、溜息をついてそっと左隣を見た。

ヤツも、こっちを見ていた。信じられない、って顔をして。それから答案に視線を戻すと、微かに首を振りながらペンを滑らせる。呆れてモノも言えないってカンジが、ありあり。そして、触るのも嫌だ、一瞬も見たくないって態度で、サッとこっちの机に答案を放った。二問以外、全部ベケ。赤ペンのベケまで、まあ優雅な感じですよ。

声に出さずにはやいていたら、隣からの冷やかな眩き。

「何の病気だ？」

「はい？」

あたしに聞いているの？ と、尻上がりの返事に疑問を込めたら、
「脳ミソ。どんな異常が起こればそこまでバカになれるんだ」

口にするのも汚らわしいと言わんばかりの嫌味さで、そっぽを向かれた。

………………。この男だけは、殺していいかな。あたしの視界から抹殺したい。同じ星に生きてると思うだけで、暴走しそうな殺意が湧いてくる！

「外人恐怖症、発動中？」

右隣の檀君が、トントんと、指であたしの机を鳴らした。からかっているのか、宥めていいのか、微笑を浮かべて気安く訊かれる。

「絶好調」

不機嫌に言えば、プツと吹き出す音がして、あたしは檀君を睨んでしまった。
けっこう、イイ性格してるよね。いろんな発見があつて、良く言えば新鮮だけど。

授業が終わると女の溜まり場になる隣の席は、人垣があたしの席を勝手に押しのかたきりして、大迷惑だった。でも、ちらちら窺っていると、奴が積極的に話をすることはなくて、一言二言発した言葉を女の子たちがキヤアキヤアと面白おかしく広げてる印象。隙間からちよいと観察すれば、奴は無関心そうに冷めた目をしている。

沢山の女子に囲まれて、「オレってイケてるぜ」的なナルシストに浸るタイプでもないのか。いや、いいんだけど。どんな男でもさ。あたしの中の「コイツ、サイテーッ!!」って感情が覆ることは、一生ないだろうし。

放課後。職員室に飛び込んで、あたしはクラス担任を掴まえた。

「大鳴先生！」

あたしの剣幕にビビったのか、大鳴先生がギョッと振り向く。

「なんで席替えで、無理矢理あの男の近くにするんですか」

「あの男？ スマクラグドス君か。仲いいんだな」

「は!? どういう解釈で、そういうカンチガイになる!？」

「ありません」

「ケンカでもしてるのか？ 許婚いいなすなんだろ？」

「イイ？ ……ナズ…ナズ？ ……許婚……」

どっから、どうして、そうなるの!? シヨミミ、もとい初耳なんですけど!？」

このときのあたしの気持ちは、どう言い表せばいいのだろう。アタマの中で、富士山が一万個くらい爆発してる。そんな感じ。まじで。

「死んでもありません」

呆然と、眩いた。

先生は「恥ずかしがらなくてもいいよ」などと、素晴らしい勘違いでニヤニヤしている。「あれ？ でもおまえ、つい最近、告白してどうのとかやってたよな。檀をカバンでぶっ飛ばして。二股はやめろよ!？」

「だから、知らないんですっ」

完璧に誤解している先生に腹が立ち、勢いあまって、先生の机をバシッと叩いてしまった。

「説明してください。どういう人なんですか？ あの外人」

先生は目を白黒させながら、あつけにとられている。

「さあ。校長先生のお達しでな。ひれ伏さんばかりに扱ってるからな」

校長先生が!? グルだったのは、校長なの!？」

「ここだけの話、スマクラグドス財閥と関わりがあるんじゃないかって、職員室でも噂なんだ。おまえのほう詳しいんじゃないか？」

まだ許婚だと思いついてるらしい先生が、あたしに話の矛先を向ける。

「スマクラグドス、ザイバツ?」

「大財閥だよ。世界最大の財閥でもあるが、メディアにはあまり情報を流さないところで、謎が多いと言われている」

ほんとに知らないのか？ って調子で、ブリッコでも疑うように苦笑いで見返される。「そんな人とあたしが許婚なんて、ありえないと思いませんか?」

何を聞いてもよくわからなくて、そう言ったら、

「俺に聞くなよ。おまえのことだろ?」

何言っただと鼻であしらわれる。あたしは、もう一つ不審に思っていたことをぶつけた。

「あの人、高校生には見えませんよね。ほんとに同い年？」

本当に何も知らないのか、と眉を寄せて、怪訝な顔を始める大鳴先生。

「十九だよ。他の生徒には言えないが」

「十九？ ダブリ!？」

二つも上で、なんで高二のクラスに!？」

「大学を卒業してらって話だ。あのケンブリッジ大学を、十一歳で首席卒業してるそう。飛び級で、九歳で入学してな。トリニティ・カレッジに通ってたとかどうとか」

……………。あ然。

その経歴が、どれほどすごいものなのかは実感が無い。けど、あたしでも知ってる、世界でも超名門の大学で。九歳で入学して、首席で卒業!？ ランドセルを背負ってる小学四年生が、大学に通ってる図を想像してみて——ありえないって!

同時に、今日見せられた答案が、脳裏に浮かぶ。あの、芸術的でいて、ものすごく頭が良いのでは、と思わされたアレ。内容もあっさりパーフェクトの。

マジで？ そんな人間が、この世にいるの!？」

…………そりゃあ、脳ミソが病氣だの異常なバカだの、言い切れるでしょうね。

あいつの性格が、読めた気がする。傲慢で不遜で態度でかくて。人を平気で見下して、それを隠しもしない。自分以外の人間は、みんなバカでサル以下だとも思っただけじゃないの？ だいたいなんだってそんな人が、平々凡々な公立校に潜り込んでるわけ？

…………理由。もしかしなくても、今までの流れと先生の口ぶりから言っただけ、あたしってこと？

来たくて来てるわけじゃない」と、のたまったアイツ。

そろそろ。いや、いい加減、事情を吐いてもらおうじゃないの。

翌日の昼休み、やっとこさで決意を固めたあたしは、女の子の群れを掻き分け、サツとヤツの机の前に立ちほだかった。

「ちよつと顔かしてくれる？」

眉を上げてこつちを見る男と、真正面から対峙することになり、そのとき初めて寸分の狂いもないこの男の顔を、きちんと見た。…………一瞬、怒気が消え失せた。あまりにも綺麗で。マックで会ったときはサンングラスをしていたし、それ以降は視界に入るのも嫌で見ないふりをしてたけど、じつくり見ると、用意してきた言葉が全部消えた。怒りと共に。

大天使ミカエル様が降臨されたと、全学年の女子たちがのぼせているのも、納得して

しまう。

見たこともない、エメラルド色に煌く瞳。吸い込まれそうになる。

……エメラルド。とても美しい、エメラルド色の瞳をしていたという父を、思い出した。もしかして、お父さんの瞳も、こんな色だったのかな？

「ちよっと！ ミカエル様になんの用なの？」

溜まっていた女子に口々に問われ、すぐ済むからと言いかけたら、ヤツが片手を軽く上げて、「少し静かにして」と彼女たちの文句を制した。

「やっとな謝罪する気になったんだ？」

訊かれて、眉を寄せるあたし。

「謝罪？ なんてあたしが、あんたに、謝らなきゃならないの？ こっちこそあんたに、釈明してほしいことがあるのよ」

「謝罪について、まったく心当たりはないと？」

「まったく。それより、ここ数日付きまとってるあんたの友達について」

話してる途中で、男が立ち上がった。場所を変えるためかと思いきや、男は、机に置いていた飲みかけのミネラルウォーターのボトルを手にする。

持っていくつもりかと見ていたら、その直後、あたしの頭の上から水が降ってきた。

四〇〇ミリリットルはあったらうと、ぼんやりと、考えているあたし。そして、ペ

ットボトルからの液体は、落ち切るのに時間がかかる、とも。流れてくる水を硬直して浴びながら、そんなことを考えていた。昼休みの騒々しい教室が、一気に静まり返る。

「やられたことは、やり返す主義なんだ」

言って、濡れそぼったあたしを見ながら、ペットボトルを置いた。

「シェイクじゃないだけ感謝しろ」

ボソッと吐かれた、冷ややかな言葉。

「あれは四〇〇ミリリットルもなかったわ」

自分の声が、奇妙なくらい、冷静に聞こえる。

怒りのマグマが、ゆっくりとうねり出す。あたしの中で。

「そういう問題じゃないだろう」

男の声も、冷静だった。

こいつは。こいつだけは……許せない。

「まさか、やり返すためだけに転校してきたんじゃないわよね？」

「まさか。君ほど暇じゃない」

「そいでしようとも。一日中、携帯いじってるんだものね。授業なんか全く聞かないで」

「へえ。気にして見てるんだ？」

冷笑されて、そっぽを向かれた。教室を出ていく姿を見ながら、あたしはもう噴火寸前。

濡れた髪が振り乱れるのかわまず、右足の上履きを素早く脱ぎ、そのまま投げつけた。バシツと小気味良い音を立てて、上履きが男の後頭部に命中する。また上履きが飛んだ！と男子たちが思ったかもしれないけど、そんなことにかまっちゃいられない。

振り返ったヤツの動きが、スローモーションに見えた。ゆっくりと息を吐きながら腕組みをして、眼差しで刺すがごとく見つめてくる。

「今、投げつけたのは、なんだ？」

「見てのとおりよ」

「……俺は、生まれてから一度も、人に手を上げられたことがない。シエイクを浴びせられたこともなければ、上履きや靴を投げつけられたこともない」

「そうでしょうとも。叩かれたこともないから、初対面の人間に、最悪なんて言葉をぶつける最悪な性格になったのよね」

こちらをじつと見つめたまま沈黙する男を、あたしも負けじと見つめ返した。教室は、恐ろしいほど静まり返っている。不自然に静まり返るシチュエーションを、最近はどうだけ体験したことか。

「やられたことはやり返すんでしょ？ どうぞやり返して。二倍でも三倍でも」
瞬きもしないあいつの目を、きっちり見据える。

「受けて立ってやろうじゃないの」

不意にあいつが動いた。文字どおり、風を切るような早い歩調で。

ギリギリのところでひるんで避けようとしたあたしの両腕が掴まれた。

この目は本気で怒ってる。やばいとわかりつつ、このまま引くのも癪にさわり、キツと睨み返す。

「放しなさいよ。逃げないから！」

ものすごい力で引きずるようにして教室を出ようとするので、抵抗して声を荒らげた。こんな力、知らない。体の大きい、本気の男の力って、こんなに怖いんだ。

「放してっ！」

自分の絶叫に、自分で驚いて、唇を噛み締める。余計なことをしなきゃよかったって後悔と、どっちみち、ぶち切れてたんだからと思っ、う聞き直りと。

戸口を出ようとする間際にチャイムが鳴って、先生が現れた。

「なんだ、どうしたんだ!？」

驚きの声を上げた先生が、あたしとこの男を確認して、絶句する。

大鳴先生の顔がためらうのを見て取って、先生は助けにならないと察した。

「こいつ、しばらく借ります」

言いながら男は、担任の返事を確かめる間もなく、あたしを担ぎ上げた。

「なにすんのよっ」